

「阪神高速 未来へのチャレンジプロジェクト」
第2回助成・事業実施報告書

1. 基本事項

団 体 名	特定非営利活動法人 O'hana 親と子の絆を育むお手伝い		
事 業 名 称	家庭訪問による育児支援活動の基盤・ネットワークづくり	助成額	50 万円
申 請 事 業 の 概 要	社会的養護の若年の初めての出産に対して妊娠期から見守り家族のしあわせと虐待のない日常生活を実現することを目的に、育児支援員が1週間に1回の家庭訪問による育児支援を無償で行う事業		
申 請 事 業 の 目 的	<p>はじめての子育てを迎えるが、子育ての仕方がわからないなどの理由で不安を抱える若年妊婦に対して、妊娠期から週に1回、6ヶ月までの間、家庭訪問を通じて必要な情報提供や育児支援を行う。愛着形成を育む子育ての方法を伝え良好な親子関係を築くことで、乳幼児虐待の連鎖を防ぐことを目的とする。</p> <p>・支援を求める対象者の居住区で育児支援員を養成し、地域に根ざして継続した支援が行えるようネットワークづくりを目的とする。</p>		
関連する SDGs 目標	   		

2. 助成事業の実績・成果等について

- ① 児童自立支援施設(神戸市立)卒園生の若年出産(10月中旬出産予定)に対して、家庭訪問による育児支援を実施するため、学園と連携を図り体制を整える。支援対象者の都合(家族関係、コロナ禍におけるリスク)で家庭訪問支援の実施には至らなかったが、学園担当者と連絡調整をする中で、特に社会的養護の出産に対し妊娠期からの育児支援の必要性を再確認することができた。
 - ② 1月18日(水)に実施した若葉学園(神戸市立)の生徒を対象にグループワーク「赤ちゃんの誕生」では、「いのちの大切さ」と「O'hanaの育児支援」について伝えることができた。生徒からは「将来、妊娠や出産した時に相談するところがあることを知ることができた。ひとりで抱えてしまいそうだから、今のうちにこんな活動でお手伝いしてくれるのを知ることができて良かった。子育ての事など分からないことを無償で教えてくれるのは、若者にとっていいなと思う。」などの感想が寄せられた。卒園前のグループワークで取り組めたことで「具体的なサポートのひとつ」として情報提供をすることができた。
-
- ③ 2月8日(水)神戸市立児童養護施設・施設長会において、家庭訪問による育児支援活動と若葉学園でのグループワークの取り組みについて事例報告を行った。社会福祉法人の施設長より、施設卒園生へのサポート要請があり、面接相談等を実施し「O'hanaの家庭訪問による育児支援」について情報提供を行った。
 - ④ 施設職員向け家庭訪問型育児支援プログラムとして House Call Supporter 養成講座を実施した。
6月8日(水)6月22日(水)7月13日(水)7月20日(水)の4日間、神戸真生塾 子ども家庭支援センターロータリー子どもの家(神戸市内)において実施した。受講者7名。施設退所後の親子関係の再構築支援、家族全体が抱える問題に寄り添い続ける伴走型支援の在り方、虐待の再発防止と安定した養育環境の重要性について様々な観点から学ぶことができた。家庭訪問による育児支援の必要性と効果についても再確認することができた。
 - ⑤ 8月4日(金)神戸真生塾の中学生・高校生を対象に「いのちのはじまり 赤ちゃんの誕生」について講座を実施した。「いのちの始まりは、奇跡的な確率」であることを知り、取り組み後の感想には「いのちの尊さやいのちの大切さへの気付き」

があった。また「新生児の赤ちゃん人形を抱いたりおむつ交換をしたりなどを体験も良い経験になった」と報告を受けた。

⑥母子生活支援施設ぐるみ乳児院(社会福祉法人大阪福祉事業財団)で職員研修を実施した。

「よりよい支援をするために アセスメントを学ぶ」をテーマに(A)7月26日(水)8月8日(火) (B)9月12日(火)9月26日(火)の計4日間、全職員を対象に実施した。面接場面を設定したロールプレイでは、支援対象者家族の長所・強みを見つけるアセスメントについて学び、職員の気づきや学びを交流することができた。

⑦家庭訪問による子育て支援の実施

大阪市在住、第1子の出産予定の妊婦さんより、知り合いを通じて、家庭訪問による子育て支援のサポート依頼があり、4月から9月まで週1回、1時間の家庭訪問を6か月間実施してきた。家庭訪問員は、母親の不安を受け止め寄り添いながら、必要な子育ての情報を伝え子どもの成長と一緒に見守ってきた。家庭訪問が終了時には「夫婦二人だけで頼る人が近くにおらず、不安になってしまう中、訪問員の存在に本当に助けていただきました。



何気ない会話や会って顔を見るだけで安心して次の1週間を過ごすことができました。・・・今、楽しく育児できているのは、最初の2か月にひとりで抱え込まなかったから。最初の2か月でいっぱいいっぱいになっていたら、この可愛さに気づけず、鬱になっていたと思う」と感想が寄せられた。「家庭訪問による子育て支援」の目標が達成できた実践となった。

3. 課題分析や今後の発展性

さまざまな環境の中で、支援を必要としながらも「支援に繋がる」ことへの難しさが、「どのようにしたら支援を届けることができるか」という課題が明らかになった。国の政策「伴走型子育て支援」では、妊娠初期から育児まで継続的に関わる支援体制を整えることとなっており、「家庭訪問型の子育て支援」が養育の困難家庭にとって SOS を出しやすい身近な社会制度のひとつとして整備されることが望まれる。

4. 代表者又は担当者からのひとこと

「阪神高速 未来へのチャレンジ事業」として取り組む機会をいただき、神戸市内の児童養護施設での講座等を実施し家庭訪問による育児支援の必要性や乳幼児虐待の未然防止に効果的な関りであることを広く発信することができた。これからも「目の前のひとりから始まる支援」を届けられるよう、幸せな子育てライフのサポートに取り組んでいきたい。